

ダゲスタンで資料収集を行って

染 矢 文 恵

2005年9月よりロシア連邦ダゲスタン自治共和国、マハチカラ市で、ダゲスタン大学歴史学部研究生として在籍（予定としては2007年3月まで）、資料収集を行った。ここではダゲスタンにおける文書館や図書館の状況、利用方法について、またこれらを利用して感じたこと等述べたい。

まずは、ダゲスタン国立中央文書館（Центральный государственный архив республики Дагестан）から。文書館はマハチカラ市の中心から少し離れた「10月運河」のそばに建っている。二つの建物からなっていて、まず門を入ってすぐのところにあるのが、1917年革命までの文書がある建物、奥が革命以降の文書を扱う建物。閲覧室も別々にある。現在は一つの文書館となっているが、92年までは前者が共和国の中央文書館、後者が党の文書館で別個の組織であった。私は今回19世紀末から1920年代初めくらいにかけての文書を読んだので、両方を利用した。まず紹介状（ダゲスタン大学歴史学部で作成）を持って行ってテーマについて話すと、どちらの建物に行くか指示される。その後閲覧室に通される。初めのうちある程度は文書館の人が助言してくれるが、大抵長く通うと、皆文書館の案内書 *Путеводитель по центральному государственному архиву Дагестанской АССР, Махачкала, 1958*（88年に文書館で作った出版されていないカタログがあるが、内容はほぼ同じ。）を渡されて自分で必要なものを探していた。ダゲスタンの文書館の人々は共和国の現在の文書や、その閲覧者の用事を処理するのに忙しく、歴史の史料を収集する閲覧者にあまりかまっている暇がないようなのである。その後必要な目録 *опись* を請求し、文書の注文となる。文書が出てくるのは三日後。これは外国人でもダゲスタン人でも同じ。コピーは革命後のもののみ許可されている。一枚5ルーブル。その他、文書以外に新聞、雑誌のコレクションがあつて、見たいというリストを持ってきてくれる。

私は大抵は革命までの文書のある建物で文書を読んでいたが、*опись* を注文する際、それが他の建物にあると言われるとそちらに移動して注文していた。しかし、二つの建物に分かれていて不便かというとなんなことはなかった。というのも、滞在中に革命までの建物の閲覧

室の改装工事があったのだが、その際もう一つの建物で、通常通り文書を読むことが出来たからである。これは有難かった。夏休みも何故か党の建物の方は開いていて、そこで持っていた文書は読み終えることが出来た。

基本的には請求した文書は殆ど見せてもらえた。しかし「土地問題」と名のつくもので見せてもらえなかった文書が幾つかあった。「土地問題」とあっても見せてくれる場合もあって請求してみなければわからないので、中々面倒だった。ダゲスタンはよく知られるように山国である。他の北カフカス地域もそうであるが、土地不足は古くから必須であったし、帝政期、ソ連期と続いて、統治政策、農地政策（・トルコへの強制移住、移住奨励・平地へのロシア人の受け入れ・平地部の民族の山地への追放・山地部に居住する民族の平地への移住奨励等々）として民族の移住政策が採られてきた。土地問題は民族問題と深く関わっている。このような事情からあまり土地に関する文書は見せたくないのだろう。

次に共和国の図書館である。パスポートと写真を持っていくとすぐにカードを作ってくれる。利用方法は普通のロシアの図書館と同じ。入り口で紙をもらって入り、本を受け取る際にサインをしてもらい出る際にそれを渡す。ただこの図書館は建物は巨大で美しいのだが、中は非常に混乱している。まず初めにカードで本を探して請求するのだが、その請求する窓口が一つではなく（ダゲスタン関係、一般書籍、古い書籍、貴重本）自分であちこち行ってみなければならぬ。カードに請求する場所の情報が記載されていないのである。図書館の人に聞いてみても、私たちもよくわからないから行ってみるしかないのだ、ということだった。それからダゲスタン関係の論文を調べられるコーナーがあるのだが、それは何とこの図書館にあるかどうかはわからないということだった。これもカードに記載されていないのである。そして調べてみて私があるコーナーで探した論文は殆どこの図書館にはないことが判明した。ダゲスタンで発行されている学術誌などに関しても欠号が多い。ここで本を探すのは非常に大変であった。

共和国の文書館と図書館以外に、ダゲスタンの科学アカデミーの図書室と、文書室（写本 フォンド Рукописный фонд Института истории, археологии и этнографии Дагестанского научного центра Российской академия наук）を利用した。図書室は共和国の図書館に比べて利用しやすい。歴史関係で北カフカスに関する書籍、雑誌など、北カフカスで発行されたもの、中央で発行されたものに関わらず、古いものから新しいものまでよく揃っていると感じた。近隣の共和国からもしばしば研究者が訪れているようである。図書室は大学院生以上で身分証明書があれば誰でも利用できる。コピーは普通の書籍は一枚2ルーブル、古いもの（コピーする人によって違いますが目安としては1917年以前）も3ルーブルでコピー出来る。この科学アカデミーの中にはダゲスタンで発行される研究書売っている小さな売店（週一回

のみ営業)もある。

文書室—写本フォンドは、二つの部に分かれている。まず一つ目は科学アカデミーの研究者がテーマごとに収集した文書や、原稿がある場所。ダゲスタン、北カフカス関係の写真史料や新聞(新聞はきちんと揃っているわけではない)もある。図書館のカード状の、テーマが書かれたカードを選び、注文するシステムになっている。歴史、考古学、民族誌学と分けられていて、そのうち歴史は、革命前(Φ1)革命後(Φ2)となっている。筆者の閲覧したものでは、ダゲスタンの共和国の文書館の他にグルジア国立中央歴史文書館(Центральный государственный исторический архив Грузии)、ロシア国立軍事歴史文書館(Российский государственный военно-исторический архив)で収集されたものが多かった。オリジナル以外は、どこの文書館からいつ集められたのか明記されている。この文書室には今回ダゲスタン共和国の文書館で閲覧させてもらえなかったものもあったので、ここである程度様子を見てから、共和国の文書館に行くのが望ましいかと思う。こちらは特に紹介状等は必要なく、通常は身分証明書と申請書のみで閲覧が許可される。コピーも許可されている。小さいものは閲覧室で、大きいものは上述の図書室にもって行くとコピーをしてくれる。モスクワと違って、古いものであろうと新聞であらうと普通のコピー機でどんどんコピーをしてくれるので、助かる反面、史料の痛みが心配であった。

もう一つは、ダゲスタンのアラビア語で書かれた本を集めたフォンドである。これらの文書を閲覧するためには、紹介状が必要で、閲覧するものによってはディレクターの許可が必要とのこと。こちらを私は利用していないので、文書室の方に話を伺ったところ、アラビア語の写本フォンドの文書の殆どは、ソ連期に各村にあったアラビア語で書かれたあらゆる文書、本を「没収」(という言葉はアルヒーフの人は使った。このフォンドの紹介文では「半世紀かけて収集された」とある。)したものを保存しており、ソ連崩壊後に一般に公開するようになったものであるとのこと。時代は11世紀から20世紀初めまでくらい。このフォンドに関する紹介文はこちら。X.A.Омаров Списки Корана, хранящиеся в Фонде восточных рукописей ИИАЭ: обзор и описание : Ислам и исламская культура в Дагестане, Москва, 2001 興味のある方はどうぞ。

ダゲスタンでは歴史的にアラビア語教育が熱心に行われていたし、革命までは村レベルでの書記は全てアラビア語が出来るものが選ばれていた。(1913年には各村の書記を一斉にロシア人に替えたため、各地で反乱が起きている。)ただし、共和国の文書館や上述の文書室で読んだ請願書や報告書等(19世紀末から1920年代初め)には、アラビア語のものにはほぼ全てロシア語訳がついていた。またダゲスタンは狭い地域に比して多言語で有名な地域だが、私の読んだ文書に限っていうと、一部の革命期の知識人関係のもの(扇動ビラ、手紙等)を

除いて、現地語のものは殆どなかった。

最後に、ダゲスタン、北カフカスで資料収集や調査をしたい方がもしいるとして、一番の不安材料は治安の問題ではないかと思う。爆弾テロや銃撃戦などはやはりあるので、絶対に安全とは言い切れないが、現在（2006年11月）のところまで日常生活で特に危険を感じたことはない。コーカサスの人々はお客好きで有名だが、ダゲスタン人もその例にもれず、基本的には他所から来た人に対して親切である。また、留学ビザがある限り、ダゲスタン内での移動、あるいはよその自治共和国に行くにせよ、何も問題はなかった。勿論田舎なので不便なことも多々ある。しかし資料収集に関して（中央の文書館を利用する必要は勿論ある）言うと、マハチカラにはモスクワで手に入らない書籍なども多くあり、実際に来て見なければわからないこともあったと思うので、結論としてはやはり現地で資料収集を行って良かったと考えている。

（東北大学大学院博士課程）